

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 30 年 5 月 31 日現在

機関番号：12601

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2013～2017

課題番号：25370465

研究課題名(和文) モンゴル語の付属語の自立性に関する研究

研究課題名(英文) Research on Mongolian particles from the perspective of their independency as a word

研究代表者

梅谷 博之(UMETANI, Hiroyuki)

東京大学・大学院人文社会系研究科(文学部)・講師

研究者番号：60515815

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,400,000円

研究成果の概要(和文)：付属語(「小辞」「助詞」とも呼ばれる)は自立語と接辞の中間的なふるまいを示す要素である。本研究では、モンゴル語の個々の付属語について、および、接辞のうち典型的な接辞とは異なるふるまいを示すものについて、母音調和やアクセントなどの観点から自立度を記述した。そして付属語の自立度が一律ではないことを示した。また、モンゴル語の付属語の品詞分類における位置づけや、通言語的な観点からみた特徴についても考察した。

研究成果の概要(英文)：This project dealt with Mongolian “particles,” which exhibit intermediate characteristics between independent words and affixes, in terms of their independency as a word. We picked up some particles (and affixes that show different features from typical ones) and described their degree of autonomy from such viewpoints as vowel harmony and accent, clarifying that their degree of autonomy varies from one to another. We also addressed topics such as the position of particles in the Mongolian parts-of-speech system and the cross-linguistic characteristics they possess.

研究分野：モンゴル語の文法記述

キーワード：モンゴル語 形態論 付属語 小辞 クリティック 品詞 記述言語学

1. 研究開始当初の背景

モンゴル語研究において「語」は、語彙的な意味を持ち語形変化をする「自立語」と、文法的な意味を持ち語形変化をしない「付属語」(「小辞」「助詞」とも呼ばれる)の2つに大きく分けられる。後者の「付属語」は、単独では文の構成要素となることができない点で語としての自立度が自立語よりは低いものの、接辞と比べればある程度高い自立度を有するとされる。

このように自立語と接辞の中間的な存在であるとされる付属語であるが、従来「付属語」として分類されてきた諸形式の自立度は必ずしも一様ではないように思われる。そこで、「付属語」に分類されてきた諸形式を詳細に記述しその実態を明らかにする必要があると考え、本研究課題の着想に至った。

2. 研究の目的

個々の付属語の自立度を詳細に記述し、付属語が自立語と接辞の間にどのように分布しているかを把握する。また、モンゴル語の付属語の品詞分類における位置づけや、通言語的な観点からみた特徴についても考察する。

3. 研究の方法

モンゴル国の首都ウランバートルを中心に話されているハルハ方言を扱った。あらかじめ用意した質問票を用いてモンゴル語母語話者にインタビューを実施しデータを入手した。調査はモンゴル国あるいは日本国内で実施した。また、自作の小規模なコーパスを用例検索の目的で用いた。

4. 研究成果

(1) 「付属語」の自立度の記述:

「否定小辞」「人称所属小辞」「文末助詞」など、従来の研究において付属語に分類されている諸形式の自立度を記述した。

「否定小辞」は動詞に前置されて当該の動詞を否定する付属語であり、これに分類される形式は複数個存在する。「否定小辞が単独で発話を構成できるかどうか」および「否定小辞と動詞の間に自立語が現れうるかどうか」等の観点から自立度を観察した。その結果、否定小辞の自立度は一様ではなく、特に bitgij (動詞の命令形の前に現れる) は単独で発話を構成することができ、自立語に近い特徴を有していることが分かった。

「人称所属小辞」については、その自立度について言及する先行研究がいくつか存在する。しかし、自立度が低いと指摘するものもあれば、ある程度高い自立度を有しているとするものもあり、記述が一致していない。そこで、アクセントと母音調和の観点から記述を行なった。その結果、アクセントの観点からはおおむね接辞と同じふるまいを示し、この点からは自立度が低いといえるが、母音調和の観点からは自立性を有していること

が確認された。

「文末助詞」は種々のモーダルな意味を表す付属語で、およそ 20 個存在する。個々の文末助詞の自立度についての断片的な言及は先行研究にも見られるが、文末助詞全体を俯瞰した研究は見られない。人称所属小辞の分析で用いたアクセントと母音調和という 2 つの観点をここでも用いて自立度を記述した。その結果、文末助詞には独自のアクセントを有し、かつ、直前の語の母音に調和しない(すなわち、自立度が高い)もの(=A)が多く含まれることが分かった。しかし、独自のアクセントを持つが直前の語の母音に調和するもの(=B) および、独自のアクセントを持たず、かつ、直前の語の母音に調和するもの(=C)も存在する。相対的な自立度は A が最も高く C が最も低い。このように、同じ「文末助詞」という名称を与えられているものでも、自立度が一様ではないことが分かった。

(2) 接辞のうち非典型的なふるまいを示すものの記述:

接辞として従来分類されている要素の中には、語より大きい単位に対して付加される、あるいは、様々な品詞の語に付加される点で付属語と類似するものがある。そうしたいくつかの要素の記述を行なった。

接辞 -lt は動詞に付加されて行為の過程や結果などを表す名詞を派生する。この接辞は多くの場合、asuu-「尋ねる」 asuu-lt「質問」に見られるように語に付加される。しかし、[usan-d sele]-lt ([水-与位格 泳ぐ]-LT)「水泳」のように、句を単位として付くこともある(例中の “[]” は -lt が付加される句の範囲を示す)。この現象の存在自体は本研究課題の開始前から確認していたが、本研究でより詳しい記述を行なった。その結果、-lt の句への付加により形成された派生語のうち、一般的に広く用いられているものは数が限られることが明らかになった。しかしその一方で、様々な句に -lt を付けることを許容する話者も存在し、話者による判断の違いが比較的大きい。そのような話者にとっては、-lt は新たな語を生み出す生産的な手段となりうるということが分かった。

動詞を派生する接辞 -s「～と言う」は、管見の限り先行研究では存在が指摘されていないものである。この接辞により形成された動詞は「～などと言うことはない」といった、特定の表現に限って現れる。この接辞は語だけではなく句や文にも付きうるということが分かった。

接辞 -x は名詞の格接辞や後置詞の後に現れて、連体修飾機能を有する語を形成することが知られている。本研究での観察の結果、-x は動詞の副動詞語尾(屈折接辞の一種で、連用修飾機能を有する動詞語形を形成する)の一つである -tal「～するまで」の後にも付加されることが分かった。このように、-x

は様々な品詞の語に付加される点で、付属語と類似する特徴を有する。

(3)モンゴル語の品詞分類における付属語の扱い：

本研究では、モンゴル語の品詞分類に際して付属語をどのように扱うべきかについても考察した。

「1. 研究開始当初の背景」でも述べたように、モンゴル語の品詞分類では、語は「語形変化をし、かつ、単独で文の構成要素になりうる自立語」と「語形変化をせず、かつ、単独で文の構成要素になれない付属語」の2つに大きく分類される。このように、語形変化をするかどうかと、文の構成要素になりうるかどうか、連動するかのような記述のしかたがとられる。しかし、上の(1)で言及した否定小辞 *bitgij* は、語形変化はしないが単独で発話可能である(すなわち文の構成要素となりうる)。このことから、語形変化をするかどうかと、文の構成要素になりうるかどうかは、必ずしも連動しておらず、分けて考える必要があることが分かる。

また、モンゴル語には *preverb* と呼ばれる動詞修飾機能を有する一群の付属語が存在する(*preverb* は語形変化をしない)。一方、名詞(=格によって語形変化する)の中には、格接辞をとともわない形(主格形)で動詞修飾をすることができるものがある。両者は、格接辞をとらない形で動詞修飾をする点で共通していることから、先行研究の中には両者を一つの範疇にまとめてしまうものがある。しかし、名詞の一語形である主格形が動詞修飾機能をもつことと、そもそも格変化しない語が動詞修飾機能をもつことを同列に扱うべきではない。本研究で得られたこうした考察結果を、モンゴル語の品詞に関する研究に今後生かしていきたい。

(4)通言語的な観点からみたモンゴル語の付属語の特徴：

付属語(および付属語に類似する要素であるクリティック)の一般的な特徴として、様々な品詞の語に付加されることが挙げられる。確かにモンゴル語の付属語もこの特徴を有するが、この特徴を生み出す要因は言語によって異なるように思われる。そこで、モンゴル語の付属語を英語のクリティック(例えば助動詞 *have, has* の縮約形)と比較し、両者の違いを考察した。そして、「付属語・クリティックが様々な品詞の語に付加される」という現象が生じるメカニズムが、両言語で異なっていることを論じた。こうした言語間の違いに関する考察をさらに深めて、付属語(やクリティック)に関する理論的な研究に貢献したい。

ところで、上述の「付属語」と「クリティック」は、文献によっては同義で用いられることがある。こうした用語の混用は特に不都合を生じさせない場合もあるが、時として不

要な混乱をまねく場合もある。本研究では、モンゴル語の付属語の記述を進める過程で、こうした用語間の違いを整理することも行なった。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計3件)

梅谷 博之 (2018) 「モンゴル語の出動名詞派生接辞 -*lt*: 句への付加」『東京大学言語学論集』39: 399-406. 査読無.

梅谷 博之 (2017) 「モンゴル語の副動詞語尾 -*tal* の後に現れる接尾辞 -*x* に関する覚え書き」『北方言語研究』7: 69-81. 査読有.

Umetani, Hiroyuki (2015) Description of the verb-deriving suffix -*s* 'to speak of' in colloquial Khalkha Mongolian, *Acta Linguistica Petropolitana* 11(3): 501-518. 査読無.

〔学会発表〕(計8件)

梅谷 博之 (2018) 「モンゴル語ハルハ方言の文末助詞の音韻的特徴」2017年度ユーラシア言語研究コンソーシアム年次総会「ユーラシア言語研究 最新の報告」、京都大学ユーラシア文化研究センター、2018年3月29日.

梅谷 博之 (2017) 「クリティック・付属語の認定基準に関する一考察」2016年度ユーラシア言語研究コンソーシアム年次総会「ユーラシア言語研究 最新の報告」、京都大学ユーラシア文化研究センター、2017年3月30日.

梅谷 博之 (2016) 「モンゴル語ハルハ方言の人称所属小辞の音韻的特徴」2015年度ユーラシア言語研究コンソーシアム年次総会「ユーラシア言語研究 最新の報告」、京都大学ユーラシア文化研究センター、2016年3月26日.

梅谷 博之 (2016) 「「クリティック」と「付属語」は何が違う?」フィールド言語学ワークショップ(特別篇)、東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所、2016年3月24日.

梅谷 博之 (2015) 「モンゴル語における形容詞を修飾する不変化詞」2014年度ユーラシア言語研究コンソーシアム年次総会「ユーラシア言語研究 最新の報告」、京都大学ユーラシア文化研究センター、2015年3月27日.

梅谷 博之 (2014) 「モンゴル語の否定小辞の自立度」日本言語学会第148回大会、法政大学、2014年6月7日.

Umetani, Hiroyuki (2013) Bare nouns before motion verbs in Khalkha Mongolian. 11th Seoul International Altaistic Conference. Seoul National University, Republic of Korea, December 6, 2013.

梅谷 博之 (2013) 「モンゴル語の名詞・
形容詞・副詞の区分」日本言語学会第 147
回大会、神戸市外国語大学、2013 年 11 月
23 日 .

6 . 研究組織

(1) 研究代表者

梅谷 博之 (UMETANI, Hiroyuki)
東京大学・大学院人文社会系研究科 (文学
部)・講師
研究者番号 : 6 0 5 1 5 8 1 5